

メディア転換期の古典籍

入口, 敦志
国文学研究資料館

<https://doi.org/10.15017/4742036>

出版情報：雅俗. 14, pp.110-117, 2015-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



メディア転換期の古典籍

入口 敦志

歴史に学べ。歴史は繰り返す。

書店の岩波文庫のコーナーで、背表紙を眺めながら、これって大変なグローバル化の産物ではないだろうか、と、いつも思う。洋の東西、聖俗、雅俗を問わず、人類の知的遺産がぎっしりと並ぶ。壮観である。『論語』や『法華経』などの古典中の古典から、近松の世話物集や、『東海道中膝栗毛』などの俗文学、『塵劫記』のような数学の書物もあれば、『純粹理性批判』などという堅い哲学書もあるという具合。訳してはならないとされる『コーラン』の翻訳まである。居ながらにして、世界中の知を手に入れることが出来るのだ。これをグローバル化と言わずして何というのだろうか。語学の全く出来ない人間として、英語をしゃべるだけがグローバル化なのかなあ、と小さな声でつぶやいてみたくなる。ここでは、そのことには深入りしない。考えてみたいことは、これらのものがすべて文庫本という同じフォーマットの中に収まっていることなのである。

中野三敏先生がいつもおっしゃっている、身分制社会においては、すべてのものに身分があり、書物もその例外ではない、とい

うこと。古典籍の書誌を勉強しているものにとっては、そのことは既に常識となっていると言ってよいだろう。前近代に、岩波文庫のようなものはあり得なかったはずである。岩波文庫は知の民主化、平等化、国際化の一種の象徴なのだ。天理図書館蔵の『国籍類書』などにその先見性を見ることが出来るかも知れないが、特殊な個別的なものと考えられ、その時代の一般的なものとして敷衍は出来まい。

現在は更に進んで、多くの情報がウェブ上に存在し、それらを自由に見ることが出来る。テキストだけではない、古典籍の画像そのものも多く見られるようになってきた。私もiPadを愛用し、これで資料の画像を見ることはほぼ日常のことになっている。しかし、その中で、次の二点については少し考えなければならぬのではないかと思っている。

一点は、モノとしての本からの乖離。もう一点は、今後の研究のあり方。

言うまでもないことだが、モニターの中の画像はやはり画像であって、モノではない。それでも、現在ではカラー画像が主流となっていて、白黒二値の画像に比べれば情報量も格段に増してき

たというのが実感ではある。しかしやはり、手触りや重さ、臭いなど、モノとしての情報が欠落しているのだ。無い物ねだりというか、要求が嵩じてきているというか、以前に比べれば贅沢な悩みだとは思うのだが。

それでも、これまで実物の書物を触ってきた人であれば、ある程度モノとしての本の雰囲気を感じることは出来るくらいにはなってきたと思うだろうとも思う。例えば、大本の漢籍も、黄表紙のような小本も、iPadの画面の中では同じ大きさで表示される。しかし、我々はそれを補整して見ており、同じ大きさに表示される大本も小本も、同じ大きさだとは判断しない。私なんぞは無精だから、サイズなどの書誌情報を参照しないまま見ていることが多いのだが、それほど困ったことにはならないのは、このような補整がそれなりに機能しているからだろう。また、嵯峨本の特製本の謡曲の画像などを見れば、なんだかその手持ちの重ささを感じてしまうようなところがある。こういうことは、白黒の画像だとあまりないのだが、カラーの画像になるとそう感じる人が多い。梅干しの味を知っているが故に、その姿を見ただけで唾液が出てくると同じことだろう。仮に水墨画として描かれた梅干しの絵を見ても、唾液は出そうにないが、絵の具を用いてリアルに描いた梅干しの絵だと唾液も出るのではないか。梅干しの酸味を思い出すためには、あの赤い色は必須である。やはり、白黒とカラーとの情報量の差は大きい。あるいは、白黒画像はテキスト化されたものに通じるような、抽象化されたものに見えているとも言えるだろうか。

今後実物に触れないまま、画像から研究に入ってくる人達が想定される。特に海外においてはそういう傾向が強まると考えられる。そういう人達に、これらの画像はどう見えることになるのだろうか。梅干しの味を知らない人は、いくらリアルな梅干しの写真を見たとしても、口の中が唾液でいっぱいになることはないだろう。典籍の画像をiPadで見るとして、その重さはすべてiPadの重さであり、その手触りは金属のつるんとした冷たい手触りである。本の大きさと手持ちの重さというのは、その本の身分を判断する上で相当に大きな情報だろう。ざっくり言ってしまう、大きい程、重い程身分の高い本である。しかし、画像から研究に入った人にはそのことは理解できない。

確かにメディアの発達とともに、情報が共有されるようになり、民主化、国際化が行われてきた。そのことは大変良いことだと思われる。一方で、日本の古典籍研究の変質が起ってくる可能性も否定できない。全く新しい発想で、画像だけから研究を起すことがありうるのではないか。

私はそのことに危惧を感じているが、一方で新しい研究がそこから生まれてくるのではないかという期待も抱いている。非人道的だとの誹りはまぬかれないだろうが、実験できることなら、学生に実物に触れさせも見せもせず、画像だけで研究をさせてみたいと思っている。テキストだけの研究ではない、しかし実物に触れることはなく、画像だけを扱う、そういう何か新しい研究方法は生まれないだろうか。言わば、岩波文庫だけで『論語』やカントの研究をするようなものかもしれない。しかし、我々にし

でも、『論語』を使うときに、木簡に記されたであろう『論語』の姿を想定し、研究に利用しているだろうか。

※ ※ ※ ※

一方で、これほど典籍の姿にこだわるのは、日本独自のものであるように思う。日本では、古典籍がその姿をとどめたまま大量に残っているのである。これが『論語』であつたらどうだろう。少なくとも孔子の弟子達が絹帛か木簡に記した『論語』そのものはまず出ては来ないだろう。断片的『論語』木簡は出土しているらしいが、その形態と『論語』の研究とはそう密接には関わらないのではないか。このことは中国と日本におけるメディア転換の歴史的経緯も関わっているように思う。

中国における最初の大きなメディア転換は紙の発明であろう。それまで、木簡や竹簡（以下、簡牘とする）に記録されてきた文章が、紙に記されるようになった。紙は後漢の蔡倫の発明とされているが、紀元前の出土例も出てきており、古くから存在したようである。しかし、やはり普及したのは後漢以降、それも徐々にと言つてよい。

紙が普及するまでは、『論語』も『史記』も簡牘に書かれていたわけである。『論語』だとそれほどの量でもないが、全百三十巻（五十二万六千五百字）とか、ウィキ情報）の『史記』だとどれくらいの量の簡牘になっただろうか。「巻」が文字通り木簡を束ねたものを巻いたものの単位だとすると、簡牘の束が百三十あつたと

いうことになる。紙ではないから相当の質量になるであろうこと、従つて扱いにくかつたであろうことは想像に難くない。簡牘など、実物に触れたり、見たりする機会はまずない。ということ、興味をお持ちの方には、東京文物という会社が出している複製シリーズをお薦めする。木簡の『王杖十簡』、竹簡の『郭店楚簡』、帛書の『馬王堆帛書』の三種類が発売されている。あと、自分で木簡を作成するキットも。『論語』の「学而篇」くらいは作つてみようとかキットも買つてはいるのだが、なかなか時間がとれない。

ところで、唐本には必ずあると言つてよい縦の罫線は、この簡牘の名残ではないだろうか。写本にもあるのだが、写本の場合は書くときに行が曲がらないようにするという実用的な意味があると理解できる。しかし、版本に必要なのだろうか。確かに版下を書くときにはあつた方がよいことは理解できるのだが、彫る工程においては罫線を残さない方が楽なように思われる。この直線を残しながら、すぐ隣の文字の細かい線を彫っていくわけで、面倒じゃないのだろうか。面倒だとすると何故面倒なものを残し続けるのだろうか。こういう面倒なはずなのにその形式を残すと言うことは、いろいろな局面に見うけられる。人間は保守的で、必要なくなったからと言つてすぐにはそれをなくしてはしまわないものの方である。例えば、スーツ袖口のボタン。本来はそのボタンを外して、袖をまくりやすくしていたものだろう。ところが、現在のものはほとんどが、単なる飾りである。私のものなど、開きもしないボタンホールまでも、ボタンの下にわざわざ縫い付けられている。形骸化の極致。一着だけジャケットで実際に外せるよう

になっているものを持っているが、これなど例外中の例外である。その形骸化したボタンと、簡牘の一本づつを示す罫線とは同じような意味を持つように思われるのである。魚尾なんて、簡牘を結わえていた紐の結び目じゃないかと空想している。こういうことは、中国の書誌学においては既に言及されているのだろうか。どなたかご教示下さい。

人文科学も科学である以上、合理的に説明出来なければならぬ。しかし、このように合理性だけでは説明出来ないことが、人間の営為を廻る問題にはたくさんあるように思う。合理性だけを追求しては誤ることも多いのではないだろうか。合理的でないことを合理的に説明出来れば良いのだけれど。

話をもどそう。

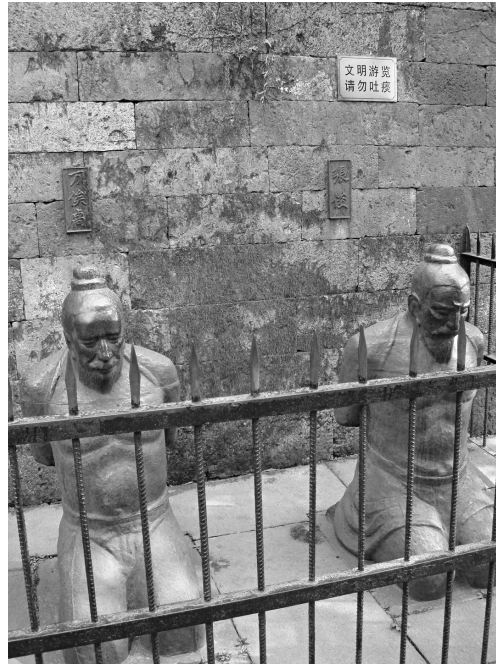
紙で出来た書物が主流となると、当然のことながらそれまで簡牘に書かれてきたものをすべて紙媒体に置き換える必要が出てくる。これが第一の大きなメディア転換であったと思われる。新しい媒体であるから、木簡であるか、竹簡であるか、絹帛であるかなど、もとの媒体とは関係なしに、またそのジャンルなども関係なしに、その内容だけが移されていくことになる。現在、電子メディア化されているのと全く同じ現象である。同じフォーマットの中に、歴史書も哲学書も、詩も小説も収斂していくのである。

簡牘から紙へ。そのメディア転換の中で、いくつかの新しい研究方法が出てきたと考えてみたいのだ。後漢から始まった訓古学、更に唐代の四部分類の誕生、類書の編纂などがそれである。書物の形態を問わなくなるのであるから、その中身である正統な

テキストをどう保証するかと言うことが必要になってきたのである。その必要から生まれたのが訓古学ではなかったか。更に、あらゆるジャンルの大量のテキストが同じフォーマットの中に平準化されて入ってしまったのだから、そのままでは利用するにも不便になる。そのために分類が必要になったと考えたいのだ。百年二百年では済まない年月がかかっている。更に、清朝にいたって、『四庫全書』が編纂されることになる。

これを書いている最中、ラジオで聞いたニュースであるが、今年（二千十五年）一月十七日はかつての中国国家主席、趙紫陽の没後十年目の命日だったらしい。しかし、彼が弾劾された「誤った方向への指導」というレッテルは貼られたままで、まだ埋葬の許可も下りていないのだとか。その日、家の周りは当局の警備でものものしかったとのこと。献花には数百人が訪れたと報道されていたが、事前に行くなどと言ったり、家の周りで行かないようにと指導するなどということもあった様子。これを聞いて、『帝鑑図説』の著者である張居正のことを思い出した。幼い万曆帝を輔佐し、政治的手腕を発揮した張居正も、没後一年にして名譽剝奪、家財没収、一族追放という弾劾を受けている。結局万曆帝の生きている間に許されることはなく、名譽が回復されたのは、次の天啓帝の時代になってから、約四十年もの月日がたつてからのことであった。

中国では一端悪となったら、一生涯どころか永遠に悪のまま評価される。杭州の西湖畔に、岳飛を祀った岳王廟がある。その門の脇に、岳飛を陥れた秦檜夫婦、万俟卨、張俊の像が置かれてい



杭州岳王廟の張俊らの像
後ろのプレートに注目（著者撮影）

ない。靖国問題がすれ違はずである。また、時間の流れも全く違っているように見えるのだ。

※ ※ ※ ※

る。後ろ手に縛られて、ひざまづいた姿で。現在その背後に「文明遊覽請勿吐痰」のプレートが貼られている（写真）。つまり、この像は本来、人々に痰を吐きかけられるため、曝されるためにここにあるのだ。しかも九百年も前の話である。日本人の感覚ではちよつと考えられない。菅原道真を讒訴により陥れたとしても、天満宮の門前に藤原時平の像を置き、叩いたり唾を吐きかけたりはしてこなかったし、これからもしないだろう。それどころか、歌舞伎化された『菅原伝授手習鑑』だと、時平^{しへい}の大臣^{おとど}は悪役ではあるが、国崩しと言われる座頭格の役でさえある。

日本の場合、ともかくにも死ぬばそれで済みである。そうであれば、切腹などなんの意味も無いだろう。しかし、中国では違っている。死んだからと言って、その罪が精算されるわけでは

では、日本におけるメディア転換はどうだっただろう。日本には、木簡と紙とがほぼ同時期に伝わり、並行していた。典籍について言えば、王仁によってもたらされたという『千字文』『論語』は、簡牘であったとは考えにくく、恐らく紙に書かれた卷子本であっただろう。日本における典籍は紙媒体から始まったと言つてよい。だとすると、現在の電子メディアへのメディア転換に到るまで、大きなメディア転換を経験しなかったと言えそうである。

十七世紀になって出版が大変盛んになるのであるが、出版そのものも八世紀の『百万塔陀羅尼』を始めとして、仏教典籍は大量に印刷されてきていたのであり、紙媒体としては一貫していた。明治維新以降の活版印刷についても同様。つまり、現在我々が曝されている電子メディアへの転換は、日本人が史上始めて経験するメディア転換なのだ。

中国は、先述したように、既に千年以上前にメディア転換を経験し、それへの対処を数百年かけて行ってきたのである。もう一度言えば、標準テキスト整理のための訓古学、大量のテキスト情報の分類整理、類書や叢書の編纂である。それだけの背景を持つているからだと思うが、中国の電子メディアへの対応は非常に早かった。このあたりのことなど、私が今更述べるまでもなく、

周知のことだろう。

話はまたそれるが、縦書き横書きの問題も関わっていそうである。中国はあっさり縦書きを捨ててしまった。現在中国で刊行されている図書の大半は横書きであり、縦書きはごく少数である。であるから、縦書きの本の場合にはわざわざ「縦排」と断り書きが付く。このことも電子メディアへの移行の早さと関わっているだろう。

焚書坑儒を経験した国だけあって、知の遺産に関する危機管理と言うことでも、中国は先進国である。『四庫全書』などは、正本が七部作成され、各地に分けて置かれていた。この危機管理は奏功し、清末の外国軍の侵攻や太平天国の乱などによって、文淵閣のものなどいくつかは隠滅したが、文淵閣のものなど四つは現存している。以前、台湾国立故宫博物院の書庫見学をした折に、宋版や『永樂大典』と並んで、文淵閣本『四庫全書』を特別に見せてもらった感動はいまだに忘れ得ない。

電子データに関して言えば、ダウンロードに制限を設けることが多いのだが、その中で早稲田大学古典籍総合データベースは画期的だ。PDFファイルとして大変容易にダウンロードすることが出来、大変お世話になっている。学内でどのような議論を経てこのような公開方法になったのかは分からないが、危機管理という意味でも大変優れていると思う。恐らく、私のように多くのPDFをダウンロードして手元に置いている研究者は、相当数に昇るだろう。そのことにより、早稲田大学の古典籍の画像データは世界中に保管されていることになるのである。仮に早稲田大学の

図書館が壊滅し、更には画像データを置いているサーバまでもがだめになったとしても、世界中に保管されている画像データによってその全体像の大半は再現できるだろう。無断利用などの悪用の危険も勿論あるだろうが、危機管理という点だけでもそのメリットの方が勝っているように思う。

中国における『四庫全書』は、日本では『群書類従』にあたるだろう。ただ、ここには決定的に異なる点がある。それは時の権力との関わりである。

もう一度中国のことを振り返ってみると、先に述べた訓詁、分類、類書などといった事業はほぼ国家権力主導で行われてきた。それほど大規模な事業だったとも言える。一方日本においては、国家主導ではことは容易に進まなかったのである。このあたりの事情は熊田淳美氏の『三大編纂物 群書類従 古事類苑 国書総目録 の出版文化史』（勉誠出版、二〇〇九）に詳しい。『群書類従』は塙保己一一人が企画し、後に幕府の援助を受けて成立したものの。とは言え、塙家は相当の借財を抱えることになってしまったという。文部省直轄の編集事業として始まった『古事類苑』は、結局神宮司庁への委託という形式をとることとなり、官から民へと移行する。『国書総目録』に到っては、民間の一出版社である岩波書店が編纂刊行を行った。『群書類従』は現在、八木書店がその電子化を行い、メディア転換に対応している。ただ、『国書総目録』については、現在は国文学研究資料館でサービスをしており、『古事類苑』についても、国文研と国際日本文化研究センターでそのテキスト化が進行中である。いずれにせよ「三大編纂物」

は民間主体で作られてきたと言える。

江戸時代にも『扶桑拾葉集』（水戸藩）、『丹鶴叢書』（新宮藩）、『甘雨亭叢書』（安中藩）などがあるが、これらがいずれも藩のレベルで企画されていることは興味深い。叢書ではないが、現代において、地方史に関しては県史や市史など相当量が刊行されているが、それに対応する国家の歴史書は編纂されていないことと何か通じるものがあるように思われる。

中国と日本のこの違いは大きい。このことは、我々が直面している現在のメディア転換においても全く同じ状況が生じていると言えるのではないか。ありていに言えば、国家は金を出さないのだ。歴史的に見ても積極的に出してこなかったし、恐らく今後も同じことだと予測される。日本の国家権力はメディアに対する基本となる政策を持たなかったともいえる。江戸幕府が、出版物に対する統制をしたといっても、写本や木活字本はその対象にならなかった。徹底していない。このことを中国学の人に話したところ、びつくりされてしまった。中国ではあり得ないことだという。写本だろうが木活字本だろうが、反政府的なことが書いてあれば、一族郎党にいたるまで徹底的に処断されるのだ。『四庫全書』にしても、その編纂の過程で、満洲族に不都合なことは排除されたと聞いている。

日本では、メディア転換に対する対応が遅れる一方で、徹底的な思想統制も出来ないということでもある。中国はその逆ということになる。どちらがいいか。これは考えものだ。

それに加えて、日本がメディア転換を経験してこなかったこと

は大きい。我々は、どのようにメディア転換に対応すべきか、そのことを模索していかなくてはならない。歴史上にモデルがないのだから。十年二十年で済むような問題ではない。中国の強大な国家権力をもつてしても、数百年はかかっていることなのだ。

※ ※ ※ ※

ただ、日本に期待できる点もあると思う。それは、最初に述べたように、このデジタルメディア転換が、テキストだけではなく、画像をも含んでいることである。簡牘から紙媒体への転換では、テキストだけが置き換えられ、簡牘や絹帛としての書誌情報は欠落してしまった。これは妄想かも知れないが、ひとつしたら、簡牘や絹帛においても、書物としての格に応じた形態的差異があったかもしれない。事実、簡牘はその長さで、用途が分けられていると言ったことも聞いた。

しかし、日本の古典籍について言えば、その歴史の浅さと島国であるという地理的特徴が幸いし、現物の資料が多く残っている。その大量の画像データが公開される方向にあるのである。つまり、訓詁的なテキスト化を経ないメディア転換が行われつつある。これは中国においても経験してこなかったことだろう。現に中国の典籍について、その画像データを大量に公開しているというのは少ないのではないか。つまり『四庫全書』で古代研究は出来るという伝統が形成されているように思われるのだ。ただし、簡牘や敦煌文書の研究は最近とみに盛んになってきている。これ

らは、テキスト化するのではなく、恐らく簡牘の画像、敦煌文書の画像そのものを使った研究になるだろう。そういう意味で、デジタル画像を使った研究は、中国も日本も同じスタートラインにいると言えそうである。むしろ、原資料を使った研究を伝統的に行ってきた日本の方が優位かも知れない。あるいは逆に、原資料に拘泥する余り、新しい研究を作り出せないと言うことも考えられるが。

そこでもう一度希望を述べておきたい。我々は、今まで経験してこなかった大きな転換点に立っている。これまでのマイクロフィルムや紙焼写真は、あくまで原資料の代用品であり、原資料にたどり着くためのひとつのツールに過ぎなかった。勿論現物を精査する研究を否定するものではない。しかし、圧倒的多数のカラー画像を見ることが出来るようになった時、現物の資料から離れて、画像データのみで出来る新たな研究が創造できるのではないだろうか。また、そういう方法を模索すべきではないだろうか。それはもう日本や中国の古籍だけの問題ではない。岩波文庫に収録されているような、人類の知的遺産のすべて、その現物がカラー画像として見られるとしたら、何か面白いことが考えられそうな気がするのだ。そんな夢を見ているのだが。

歴史に学べ。歴史は繰り返す。